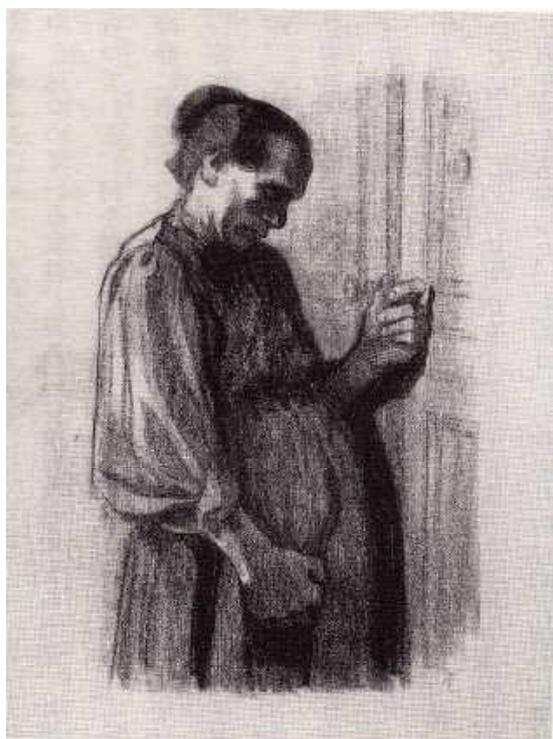


宮本百合子とケーテ・コルヴィッツ

ピースあいち研究会 丸 山 豊

宮本百合子は 1941 年、評伝「ケーテ・コルヴィッツの画業」(『アトリエ』1941.3) を書いている。日米開戦の9ヶ月前である。この時期、夫宮本顕治は獄中にあり、百合子も何度も検挙され健康も害し自由な作家活動は許されなかった。しかし、この中であっても彼女は特別な思いをもって「ケーテ・コルヴィッツ」を歴史的に評価した。ケーテを「生涯と芸術で戦争に反対」した「真実に生きた女性」として執筆したのである。(注1)



医者の下で(訪問) 1908

百合子が評伝の冒頭にとりあげた作品が一枚のデッサン「医者のもとで」(左写真参照)だ。(注2)

「貧しい服装をした中年の女がドアの前に佇み、永年の力仕事で節の大きく高くなった手で、そのドアをノックしている。」百合子は、この女のたくましい手と老けて沈んだ顔からいろいろ想像する。「名もない、一人の貧しい、身重の女が全身から滲み出しているものは、生活に苦しんでいる人間の無限の訴えと、その苦悩の偽りなさと、そのような苦しみは軽蔑することが不可能であるという強い感銘を受けた」と書き、この貧しい母は子どもの誕生を素直に喜ぶのかと診察前の不安まで描き出すケーテに驚く。

百合子は「貧困、失業、働く妻、母子などの生活のさまざまな瞬間をとらえて描いている」ケーテ作品の社会に対するリアルな眼差しを評価した。

ヒトラーに弾圧されても表現活動を止めず、抵抗を貫いたケーテ・コルヴィッツの心の叫びに深く共鳴し勇気づけられたに違いない。信ずるもののために闘い、戦争を告発し、世界の幸福と平和を願う人間として、ふたりは同時代に生きた。

「ケーテ・コルヴィッツの画業」は、歴史に対する正しい先見性と、芸術と社会のあり方を現在(いま)の私たちに問いかけてくる。(注3)

(2017.7.12)

注1：宮本百合子『真実に生きた女性』(新装丁 新日本出版社 1989 初版は戦後 1946 年創生社より出版)で澤田章子は「ケーテ・コルヴィッツの画業」について「啓蒙的な意図をはるかに越えて、宮本百合子自身の芸術的、人生的な共感に溢れる著述であり、読者をケーテ・コルヴィッツの

画業への関心へと誘う優れた評伝である」と解説している。

2017年7月出版の『新編 若き知性に』（新日本出版社）にも「ケーテ・コルヴィッツの画業」が新たに追加された。岩崎明日香の解説によると、「（百合子は）1941年2月から再び執筆禁止とされ、敗戦まで沈黙を強いられた」とある。3月に出版できたのは、この評伝を書き終えた直後だった。

注2：丸木俊もこのケーテ・コルヴィッツの「訪問」の妊婦像をイメージし《原爆の図》第1部「幽霊」を手がけたと指摘されている（小沢節子『原爆の図』）。

注3：戦後1946年6月、百合子はケーテの死を知り、追記でこう付け加えた。

「ナチス迫害のうちに過ごした晩年の十年間が、ケーテにとってどのような時々刻々であったかということは、およそ想像される。それでも彼女はくずおれず、しっかりと目をあいて恐ろしい老齡の期節をほこりたかく生きとおした。」と弾圧に耐えたケーテを讃え、その死を悼んだ。